新小辞林

第三版

三省堂編修所編

新小辞林

第三版

三省堂編修所編

三省堂

1957年 2月15日　初版発行
1975年 5月20日　第2版発行
1982年 2月20日　第3版発行

新小辞林　第三版

定価　一、二〇〇円

一九八二年　二月二〇日　第一刷発行

編者　三省堂編修所

発行者　株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

印刷者　三省堂印刷株式会社

発行所　株式会社 三省堂

〒101　東京都千代田区三崎町二丁目二十二番十四号

電話　編集（03）三230-9211
販売（03）三230-9213
総務（03）三230-9221

振替口座　東京 六-五四三〇〇／商標登録番号　三七九八三三

内部交流

S80/37　（日6-2/146）

新新小辞林　第3版

BG000570

前書き

この『新小辞林 第二版』は、昭和三十二年に刊行した『新小辞林』に、時代の推移に応じた改訂を施し、一般社会人向きに編修しなおした、ハンディーで実用的な現代語辞典です。見出し語には、日常の生活に必要な言葉を中心に、五万余語を選んで収めましたが、会話に使われる言葉よりは、読み書きに使われる言葉の方に、より重点を置きました。しかし、単に難しい言葉の意味を調べるためだけではなく、書類を作成したり、手紙や日記などを書く時にも便利なように、見出しの言葉を選び、解説や用例を工夫してあります。

表記に関しては、昭和四十八年六月十八日内閣告示の「当用漢字音訓表」及び「送り仮名の付け方」を、よりどころとしました。

今回の改訂に当たっては、初版の編修に御協力いただいた、大妻女子大学教授天沼寧先生に、全体を通覧していただき、更に、新項目の原稿執筆や、表記上の御指導など、多大の御尽力を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

この辞書が、職場で、家庭で、多くの方々のお役に立つようにと念願しています。

昭和五十年五月　　三省堂編修所

昭和五十六年十月一日内閣告示第一号をもって「常用漢字表」が告示されましたので、この辞書の見出し語の漢字表記を「常用漢字表」によって改訂し、第三版としました。

昭和五十六年十月　　三省堂編修所

この辞書の決まり

一　見出し語

1　言葉

(1) 現代の言語生活に必要な語、およそ五万一千を収めた。

(2) いわゆる古典語は原則として除いたが、慣用語句等として、現代でも生きて使われている語は収めた。

(3) ローマ字の字母の呼び名やつづりによる略語・記号等は、原則として付録「ローマ字書き略語・記号一覧」にまとめた。

2　表記

(1) 和語・漢語は、平仮名ゴシック体で、外来語は、片仮名ゴシック体で掲げた。

ただし、「たばこ」「きせる」「かるた」「かっぱ」など、外来語としての意識が一般に薄くなっていると思われるものは平仮名とした。

(2) 「現代かなづかい」（昭和二十一年十一月十六日　内閣告示第三十三号）によった。

なお、外来語の長音は「ー」で表した。

(3) 複合語は、語の構成要素に応じて、字間を少し開けた。

(4) 活用語は、原則として終止形で掲げ、いわゆる語幹と活用語尾の間に「・」を入れた。ただし、

(ア) 形容動詞、及び、漢字二字以上からなるサ行変格活用の漢語動詞は、語幹だけを掲げた。

(イ) 助動詞には「・」を入れなかった。

〔例〕 **ある・く**〔歩く〕（自五）
しろ・い〔白い〕（形）
はって・ん〔発展〕（スル自）
はなや・か〔華やか〕（ニ形動）
たい（助動・形型）

(5) 用言で、いわゆる文語形と口語形の両形があるものは、原則として口語形だけを掲げた。

〔例〕 **あ・てる**〔当てる〕（他下一）
かしこ・い〔賢い〕（形）

(6) 複合語・派生語で、初めの三音節以上に当たる部分が、単独語等として既に見出し語（これを「親項目（親見出し）」という。）にある場合は、その同音の部分に「ー」を用いて掲げた。（これを「子項目（子見出し）」という。）

〔例〕 **くらい**（キラ）〔位〕……。**ー・する**……。**ー だおれ**（フレ）〔ー倒れ〕……。**ー づけ**〔ー付け〕……。**ー どり**〔ー取り〕……。**ー まけ**〔ー負け〕……。

(7) 慣用句・ことわざ等のいわゆる連語については、

(ア) 親項目に相当する語等を含んでいる連語は、〔　〕で囲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

み、親項目に相当する部分を「ー」で表した。連語の場合は(6)の複合語の場合と異なって、同語源ならば親項目の音節数には関係なく「ー」を用いて、追い込んで掲げた。

〔例〕**か**【可】……。【ーもなく不可もない】

(イ) 相当する親項目がない連語は、その連語を、独立の見出しとして掲げた。

〔例〕**おそかれはやかれ**【遅かれ早かれ】

(8) 動詞の連用形と同形の名詞で、わざわざ見出しとして立て、かつ、語釈等を施すまでもないと思われるものは、その動詞の語釈等の末尾に、名詞としての語形だけを掲げるにとどめた。この場合は、見出し語の語幹に当たる部分を「ー」で表してある。

〔例〕**さけ・ぶ**【叫ぶ】(自五)……。**ーび**(名)

3　見出しの立て方

(1) 同音・同語源の語は、なるべく同一の見出しにまとめた。

〔例〕**と・る**(他五) 一【取る】㊀……。㊁【盗る】……。㊂【獲る】……。㊃【獲る】……。㊄【採る】……。㊅【捕る】……。㊆【執る】……。㊇【撮る】……。

(2) 外来語は、片仮名で表記した時の語形が同一ならば、原語ではつづりを異にする別語であっても、同一の見出しにまとめた。ただし、つづり字のアルファベット順に、一 二 三 ……で各語を区別した。

〔例〕**ライト** 一【light】……。二【right】……。

4　配　列

(1) 五十音順に並べた。

(2) 外来語の長音を表す「ー」は、そのすぐ上の仮名が表す音節の母音に相当する仮名で書き表したものと見なした。

(3) 拗音(ヨウ)を表す「ゃ」「ゅ」「ょ」、及び、促音を表す「っ」は、それぞれ直音の「や」「ゆ」「よ」、及び、「つ」より前とした。

(4) 清音・濁音・半濁音の順にした。

(5) 見出し語が同じ仮名の場合は次によった。

(ア) 造語成分・接辞・単語・連語の順。

(イ) 和語・漢語・外来語の順。

(6) 子項目とした連語と複合語は、

(イ)(ア) 連語・複合語の順。

(イ) 連語・複合語が二つ以上ある時は、それぞれ五十音順。

5　歴史的仮名遣い

和語の見出しには、歴史的仮名遣いを片仮名二行書きで添えた。ただし、「現代かなづかい」と一致する部分は、語の構成要素に従って「ー」で省略した。

〔例〕**まいひめ**(マヒ)【舞い姫】

ひたい(ヒタ)【額】……。**ーぎわ**(ギハ)【ー際】

二　漢字表記

1　見出し語等に当てるべき漢字を（交ぜ）用いた書き表し方等は、【　】で囲んで掲げた。（これを「漢字表記」という。）

2　連語の漢字表記は【　】で囲んで掲げた。

3　子項目の漢字表記は、親項目と同じ表記の部分に「―」を用いた。ただし、親項目に二通り以上の漢字表記がある場合は、子項目で「―」を用いなかった。

〔例〕**ゆうびん**【郵便】……。**―きょく**【―局】……。**―ばんごう**【―番号】……。

つかいヒッカ【使い・遣い】……。**―こ・む**【遣い込む】……。**―こな・す**【使いこなす】……。**―こ・む**【遣い込む】……。

なごり　㊀《《余波》》……。㊁《名残》……。**―おお・い**ホイ【名残多い】……。**―おし・い**シイ【名残惜しい】……。

4　漢字表記の箇所に付した記号の意味は、次の通りである。

（……「常用漢字表」（昭和五十六年十月一日　内閣告示第一号）に掲げてない漢字。（これを「表外字」という。）

《……「常用漢字表」に掲げてない音訓。（これを「表外音訓」という。）

また、二字以上の漢字が（　）で囲まれている場合はすべて表外字であり、【　】で囲まれている場合はすべて表外字・表外音訓を用いる表記を後に掲げた。

5　漢字表記が二通り以上ある場合は、原則として、である。

6　漢字表記の送り仮名は、昭和四十八年六月十八日　内閣告示第二号「送り仮名の付け方」の通則一から通則六までの「本則」・「例外」、通則七、及び、「付表の語」（ただし、なお書きを除く。）によった。

7　語釈を㊀㊁……と分けたところに【　】で囲んで示してある漢字表記は、その語釈の意味を表す場合に、従来用いられてきたものである。また、意味によって送り仮名に異同がある場合も、ここで示した。

〔例〕**よ・む**【読む】（他五）㊀……。㊁【詠む】歌を作る。……。

とし より【年寄り】㊀……。㊁【年寄】相撲興行の……。

8　外来語は、【　】で囲んで原語のつづりを掲げ、かつ、「英語」以外はすべて、所属する言語名を注記した。

三　文法的職能

1　文法的職能は（　）で囲み、次の略語で掲げた。

(1)　品　詞

（感）……感動詞　（接頭）…接頭語　（接尾）…接尾語
（格助）…格助詞　（副助）…副助詞　（接助）…接続助詞
（終助）…終助詞　（助動）…助動詞　（接）……接続詞
（副）……副　詞　（連体）…連体詞　（形）……形容詞

(自)……自動詞　(他)……他動詞　(形動)…形容動詞
(代名)…代名詞　(名)……名　詞　(連)……連　語

(2)
活　用
(五)……五段活用　(四)……四段活用
(上一)…上一段活用　(上二)…上二段活用
(下一)…下一段活用　(下二)…下二段活用
(サ変)…サ行変格活用　(ス)……サ行変格活用
(スル)…サ行変格活用　(ク)……(形容詞)ク活用
(ニ)……(形容動詞)ニ活用　(シク)…(形容詞)シク活用
(ト)……(形容動詞)ト活用　〔下段は古語の場合だけ。〕

2 品詞の分類は、最も一般的なものによった。

3 用言は、活用の種類を示した。

4 動詞は、自動詞と他動詞の区別を示した。

5 (スル自)(スル他)とあるものは、見出し語は名詞の形であるが、それぞれサ行変格活用の自動詞・他動詞としても用いられる語である。

〔例〕**だつらく**【脱落】(スル自)
はいりょ【配慮】(スル他)

6 (ニ形動)(ト形動)とあるものは、見出し語が形容動詞の語幹であり、その連用形が、「―に」「―と」という形の語であることを表している。

(名・ニ形動)のようにあるものは、見出し語は名詞であるが、ニ活用の形容動詞としても用いられる語であることを表している。同様に、㊀(ニ形動)のようにあるものは、見出し語が名詞であって、㊀の意味で用いる時はニ活用の形容動詞でもある語であることを表している。

名詞の性格をもつ漢語でも、名詞として用いられることが極めてまれで、ほとんどの場合、形容動詞として用いられるものは、形容動詞だけの表示にとどめたものもある。

〔例〕**はなやか**【華やか】(ニ形動)
もくもく【黙黙】(ト形動)
ふかい【不快】(名・ニ形動)
かって【勝手】㊀……。㊁(ニ形動)わがまま。

7 見出し仮名の下部に++印を付けたものは、普通は、単独では用いられず、他の語と結び付いて使われるもの(造語成分)である。ただし、接頭語・接尾語には++印を付けなかった。

〔例〕**さらい**++【再来】

8 助動詞の活用は、特殊な活用をするもの以外は、(助動・形型)(助動・下一型)のように示した。「形型」は形容詞の活用に、「下一型」は動詞の下一段活用に、準ずることを示す。

〔例〕**たい**(助動・形型)
れる(助動・下一型)

四　語　釈

1 語釈は簡潔・的確を旨とした。また、用例・同意語・対語(↔)・参照語(→)などを添えて理解の便を図った。

2　語釈を施すまでもないと思われる語の中には、語釈を省いて、用例や対語だけを掲げたものもある。

3　語義が二つ以上ある場合は、㊀㊁……と分けた。また、品詞・活用・漢字表記が異なる場合、及び、外来語のつづりが異なる場合は、㊀㊁……で分けた。

4　スペースの節約を図るため、語釈や用例などで、次のような方法を用いた。左の例の(1)、(2)、(3)は、いずれも、(a)、(b)二通りの意を表している。

〔例〕

(1)　危険(死)を免れる。　(a)危険を免れる。　(b)死を免れる。

(2)　全く・透き間(ゆとり)がない。　(a)全く透き間がない。　(b)全くゆとりがない。

(3)　免許(の証書)。　(a)免許。　(b)免許の証書。

5　現代語としての語義のほかに、古語としての語義をもつものも、原則として、現代語の語義だけとし、特に必要があると思われるものに限り、〔古〕として古語の語義を添えた。

また、〔文〕としたものは、主に文章語としてしか用いられないと考えられるものである。

6　語釈・用例の表記

(1)　原則として「当用漢字表」「当用漢字音訓表」、及び、「現代かなづかい」によった。

(ア)　表外字、及び、表外音訓には、（　）内に片仮名で読みを示した。ただし、その漢字・音訓が見出しの漢字表記に使われている場合は、これを省略した。

(イ)　当用漢字の補正資料で追加する二十八字と、著名な固有名詞、及び、次の七語は、読みを示さないで用いた。

已然(イゼン)　撥音(ハツオン)　宋音(ソウオン)　歌舞伎(カブキ)

浄瑠璃(ジョウルリ)　拳闘(ケントウ)　蹴球(シュウキュウ)

(2)　送り仮名は、「送り仮名の付け方」を、その「許容」等を含めて、全面的によりどころとして用いた。

(3)　語釈では、次のような場合に片仮名を用いた。

(ア)　外来語。(長音は「ー」を用いた。)

(イ)　動植物の名前(必ずしも学術上の名称ではない。)などで、当用漢字では書けないもの。

〔例〕　トラ　イワシ　イチゴ　ゴボウ

(ウ)　擬声語、及び、一部の擬態語。

〔例〕　ガタガタ　ウロウロ　ムッと

(4)　用例の中で、見出し語に当たる部分には「―」を用いた。用言は、用例での用法が連体形であっても、その語形が見出し(終止形)と同じものは、「―」で示した。また、活用形が見出しと違う時は片仮名書きとした。

〔例〕　**するど・い**【鋭い】(形)……。「―刃」

てが・ける【手掛ける・手懸ける】(他下一)……。「長年テガケた仕事」

あ

あ〔亜〕亜細亜(アジア)の略。「―欧」「東―」

ああ〔嗚呼・感〕「―驚いた悲しいかな」

アーク〔arc〕**とう**〔灯〕〔アークは、弧の意〕電灯の一種。相対する二本の炭素棒に、電流を通じて弧状放電を起こさせ、白熱光を出させる。弧灯。弧光灯。

アーケード〔arcade〕㊀道路・通路に屋根風の覆いをした商店街。㊁大建築物。内にある商店街。㊂アーチを連続して使った建築物。一地中を結ぶ電路。接地線。

アース〔earth〕洗たく機・電子レンジなど電気機器と

アーチ〔arch〕㊀れんが・石材などで、トンネルの上部のように半円形に築く方法。せりもち。㊁スギ・ヒノキなどの葉でおおった弓形の門。緑門。

アーチスト〔artist〕芸術家。アルチスト。↔アルチザン

アート〔art〕㊀芸術。美術。技術。㊁アート紙の略。―し【―紙】スベスベしてつやのある印刷用紙。写真印刷に適する。

アーベント〔ドイ Abend〕〔夕方の意〕特殊の目的で夜に催す音楽会・映画会。…のタベ。…ショパン―

アーム〔arm〕㊀腕。㊁腕のような形をした物。腕木。―

チェア〔armchair〕ひじ掛けいす。

アーメン〔amen〕〔ヘブライ語で、確かに・かくあれかし等の意〕キリスト教で祈りなどのあとに唱える語。

アーモンド〔almond〕バラ科の小さきょう木。果実は桃に似て、実は平たく、食用・薬用。

アール〔フランス are〕面積の単位。100㎡。約三十坪二合五勺。約一畝。

アールエッチいんし〔Rh因子〕人間の血液中の成分の一で、その有無によって、Rh(+)とRh(−)に分ける。Rh(−)の人がRh(+)の輸血を受けると反応が起こり、Rh(−)の女性が妊娠した胎児がRh(+)だと胎児に危険がある。

あいい〔相〕〔接頭〕㊀ともに。一緒に。二人で。「―乗り」㊁互いに。「―知る」㊂〔動詞の上につけて語勢を添え、また語調を整える。「―成らぬ」〔―携えて〕協力して。一緒に。「―俟って」互いの力によって。一緒になって。

あいだ〔間〕㊀あいだ。すきま。「山谷(やまたに)―」㊁あいとま。

あいい〔藍〕㊀タデ科の一年草。㊁アイの葉や茎から採る染料。(の色)。藍色。

あいい〔愛〕㊀かわいがりいつくしむこと。(心)。㊁恋。

あいい〔蒲鉾〕(ト形動)㊀茂り合うさま。㊁互いに心がうちとけるさま。「和気―」

あいあいがさ〔傘〕〔相合い傘〕一本の傘を男女二人でさすこと。相傘。

アイアン〔iron〕〔頭部打球部〕が金属製のゴルフ用クラブ。↔ウッド

あいいく〔愛育〕(スル他)かわいがって育てること。

あいいん〔合印〕書類・帳簿などの引き合わせで、両方が符合したしるしに押す印。合判。「合うこと。

あいうち〔相撃ち・相打ち〕(スル自)二者同時に打ち

あいえんか〔愛煙家〕たばこが非常に好きな人。

あいえんきえん〔合縁奇縁〕男女・夫婦などの間が、合うも合わぬも、みな不思議な縁によるものである。

あいおい〔相生〕㊀ともに育つこと。「―の松」㊁同じ根もとから二本の幹がはえていること。

あいか〔哀歌〕悲しい思いをうたった歌。エレジー。

あいがかり〔相懸かり〕㊀将棋の序盤で双方が同様の駒の組みで対すること。㊁敵味方が互いに攻め合って戦うこと。

あいかぎ〔合い・鍵〕一つの鍵の外に、その錠に合う別の鍵。

あいかた〔相方〕㊀相手。㊁〔敵・媒〕(遊里で)客の相手になった遊女。㊂〔合方〕①能楽のはやし方。②芝居で役者のせりふに合わせて入れる三味線。

あいかわらず〔変わらず〕(相変わらず)副)今までと同様に。

あいがん〔哀願〕悲しみと喜びの「人生の―を味わう」

あいがん〔哀願〕(スル自)哀れっぽく頼むこと。

あいがん〔哀願〕(スル他)いつも、見たり触れたりして楽しんでいること。㊁たいせつにすること。

あいき〔愛機〕気に入って、大事にし、愛用している飛行機・写真機・携帯機など。

あいき〔愛〕と合い着・間着〕㊀上着と下着との間に着る着物。㊁冬服と夏服の間に着る洋服。合服。

あいきゃく〔相客〕㊀同席の客。㊁同室に泊まり合わせた客。

あいきょう〔愛嬌〕生まれ故郷を愛すること。

あいきょう〔愛敬・愛想〕㊀にこやかで人づきがよい品物に添えるおまけ。四興を添えるもの。

あいきょう〔愛敬〕(スル他)親しみ敬うこと。

あいく〔愛玩〕(スル他)いつも、見たり触れたりして楽しんでいること。㊁たいせつにすること。

あいく〔愛〕(スル他)かわいがり保護すること。

あいぐう〔哀号〕㊀悲しみ叫ぶこと。㊁中国・朝鮮で葬式の際、式の一部として皆で泣き叫ぶ時にいう語。

あいくち〔合口・匕首〕(「匕首」は「ひしゅ」とも読む)㊀短刀。九寸五分。㊁ことば。㊂主義・主張などの流行的標語。

あいくるしい〔愛くるしい〕(形)非常にかわいらしい。

あいこ〔相子〕勝負なし。「―でしょ」

あいこ〔愛顧〕(スル他)引き立てること。ひいき。

あいこ〔愛護〕(スル他)かわいがり保護すること。

あいこう〔哀号〕㊀悲しみ叫ぶこと。㊁中国・朝鮮で葬式の際、式の一部として皆で泣き叫ぶ時にいう語。

あいことば〔合い言葉〕㊀事前に決めておき、合図に使うことば。㊁主義・主張などの流行的標語。

あいごま〔相駒〕(将棋で)防御のため、相手の駒と自分の駒の間に打つ駒。あい駒。間遮(ま)い。―がきく」

あいさい〔愛妻〕㊀いとしく思い大切にしている妻。㊁妻を大切にすること。「―家」

あいさつ〔挨拶〕(スル自)㊀応接。応待。㊁答礼。㊂儀礼的なことば。を述べること。「時候―」任

〜は常用漢字以外の漢字　〜は常用漢字表にない音訓

あ

の—」㊀〔御—〕の形で〕すげないことば。「それは御「—だね」。

あいし【哀史】悲しい・歴史(物語)。

あいし【愛児】親がかわいがり大切にしている子供。

あいじゃく【愛着】(スル自) 目のふちに塗って、陰影をつけるための化粧品。

アイシャドー【eye-shadow】

あいしゅう【哀愁】やるせない悲しみ。物悲しさ。

あいしゅう【愛執】愛情にとらわれ思い切れないこと。

あいしゅう【哀愁】悲しみあわれむこと。

あいしゅう【愛情】(ジョウ)

あいしょう【相性】男女の性(セイ)が合うこと。☆相剋

あいしょう【哀傷】(スル他) 悲しみいたむこと。「—歌」

あいしょう【愛妾】他人の「めかけ」をいう語。「—前」

あいしょう【愛称】(本名以外の)親しみをこめて呼ぶ名

あいしょう【愛唱】(スル他) 好んでうたうこと。「—歌」

あいじょう【愛誦】好んで口ずさむこと。

あいじょう【愛情】かわいいと思う気持ち。

アイス【ice】①こおり。②アイス クリームの略)水菓子の一種。③高利貸しの俗称。—**キャンデー**〔和製英語 ice candy〕果汁やシロップなどを、棒状その他の形に凍らせた氷菓子。—**クリーム**〔cream〕牛乳・卵黄・砂糖・香料を混ぜ合わせてクリーム状に凍らせた食品。氷菓子。—**バーン**〔ディ Eisbahn〕降り積もった雪の表面が氷のようになった状態(のスキー場)。—**ホッケー**〔hockey〕氷上でスケートを履いてするホッケー。「チーム六人。

あいず【合図】(スル自)「—の鐘」出発の—」

あいする【愛する】(愛)①かわいく思う。②たいせつにする。③高利貸しの俗称。

あいせき【哀惜】(スル他) (人の死を)悲しみ惜しむこと。

あいせき【愛惜】(スル他) 非常に惜しむこと。

あいせつ【哀切】(名・ナ形動) 非常に、哀れで悲しいこと。

あいせん【相先】(碁・将棋で)互いに先番となること。

あいぜん【愛染】執着すること。ぼんのう。—**みょうお**

あいて【相手】「—とする」になる」「遊び—」—**どる**「取る」(他五)(争いの)相手として取り上げる。

アイディア【idea】①理念。イデ！。②着想。構想。趣向。

あいでし【相弟子】同じ先生のもとで学ぶ者どうし。「おくやみ。

あいと【哀悼】(スル他) 人の死を悲しみいたむこと。

あいど【愛読】(スル他) 好んで読むこと。「—者」

アイドル【idol】①偶像。崇拝される人(物)。②人気者。

あいなめ【鮎(並)】中形の近海魚。形はスズキに似る。照り焼き・塩焼きに適する。あぶらめ。あぶらこ。

あいにく【(生憎)】(副・ニ形動)「あやにく」の転)不都合なさま。おりあしく。気の毒。「—雨だ」

アイヌ 北海道・樺太(ｶﾗﾌﾄ)・千島に住む民族。昔は「えぞ」「えみし」と呼ばれ、内地にも住んでいた。

あいの こ【(合いの子)】(間の子)①混血児。雑種。②どちらともつかない中間のもの。「—弁当」

あいの て【(合いの手)】(間の手)①歌と歌の間に入れて奏する音曲。②話と話の間にはさむことば。

あいはん【(合い判)】①あいいん。②連帯で押す印。

アイバンク【eye bank】登録者の死後、その角膜を保存し、移植を希望する盲人にあっせんする機関。角膜銀行。眼球銀行。目の銀行。

あいびき【(逢い引き・(嬬)(曳き)】(スル自) 男女が忍んで会うこと。密会。

あいぶ【愛撫】(スル他) 非常にかわいがること。

あいふく【(合い服)】(間服) 合い着(ギ)。

あいふだ【(合い札)】①金や品物を預かった証拠に渡す札。引き換え札。②割符。「別れる苦しみ。

あいべつり く【愛別離苦】(仏)八苦の一。愛する者と

あいべや【(相部屋)】宿屋などで、他人同士が同じ部屋に泊まること。

あいぼう【(相棒)】①共同で仕事をする人相手。仲間。②囲碁(ｲｺﾞ)を一緒にかつぐ相手。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

あ

アイボリー【ivory】㊀象げ。㊁象げ色。「―ホワイト」㊂象げ色の厚手の洋紙。「―ペーパー」

あいまい【曖昧】(名・ニ形動) ㊀はっきりしないさま。☆明瞭(メイリョウ)。㊁うしろぐらいさま。怪しいさま。「―屋」淫売屋(イバイ)。

あいみたがい(ガイ)【相身互い】互いに助けたり助けられたりすること。お互いさま。武士は―」

あいもち(ア)【相持ち】㊀互いに持ち合うこと。㊁助け合うこと。㊂費用を平等に負担すること。㊃あいこ。

あいやど(ア)【相宿】同じ宿に泊まっていること(人)。

あいよく【愛欲・愛慾】㊀愛着する心。㊁性愛の欲望。

あいよめ(ア)【相嫁】兄弟の妻同士(が互いに呼ぶ称)。

アイライン【eye line】目の化粧法の一。上下のまつ毛の生え際にそってかく青・黒などの線。

あいらしい【愛らしい】(形) かわいらしい。

あいろ【隘路】㊀狭くて険しい道。㊁障害。困難。

アイロニー【iron】㊀反語。㊁皮肉。風刺。

アイロン【iron】㊀洋式のひのし。「―をかける」「電気―」「―一台」㊁髪の毛を縮らせること。

あうウ(自五)【合う】㊀一つに寄りつく。☆離れる。㊁あてはまる。合致する。㊂(動詞について)互いに…する。㊃会う。逢う。㊄ひきあう。㊅(動詞について)…できる。㊆面会する。㊇出会う。㊈(…に)…なること。迷惑なこと。困ること。苦しいことなどを身に受ける。「水害(大雨)に―」「会うは別れの始め」「会う」ということは、すでに「別れる」という運命の前提である。

アヴァンギャルド【フラ avant-garde】(前衛の意)革新的な芸術運動をおこなう芸術家の総称。前衛派。アバンギャルド。

アヴァンゲール【フラ avant-guerre】(戦前の意)戦前の思想・生活態度を持っている(保守的な)人々。戦前派。アバンゲール。☆アプレゲール。

アヴァンチュール【フラ aventure】冒険的な恋愛事件。アバンチュール。

アヴェマリア【ラテ Ave Maria】㊀(カトリックで)聖母マリアを賛美する祈りのことば。㊁聖母賛歌。アベマリア。

アウト【out】㊀(庭球・卓球などで)ボールが線外に出ること。☆イン。㊁(野球で)打者・走者がその権利を失うこと。☆セーフ。―**コース**【和製英語 out-course】☆イン コース。㊂(トラック競技で)外側の走路。㊃(野球・ソフトボールで)打者が塁から離れた所を通るボールの進路。㊄(ゴルフで)前半の九ホール。―**サイダー**【outsider】局外者。協定未参加者。―**ドア**【outdoor】戸外・屋外。―**プット**【output】☆インプット。㊀出力。㊁(スル他)電子計算機で処理した結果を、出力装置から言語・記号・図形・映像など、人間に理解できる形で取り出すこと(取り出した情報)。―**ライン**【outline】㊀輪郭。外郭。㊁概要。あらすじ。

アウトバーン【ドイ Autobahn】ドイツの、高速自動車専用道路。

アウフヘーベン【ドイ Aufheben】(スル他)(弁証法で)止揚。揚棄。

あうん【阿吽】(阿は吽の字母の最初で口を開いて発する声、吽は最後で口を閉じた時の声)㊀仁王(ニオウ)や狛犬(コマイヌ)の、一方は口を開き他は閉じているものにいう語。㊁呼気と吸気。【―の呼吸】相撲の仕切りなどで両者の立ち上がろうとする気合い。

あえヱ**ぐ**【(噛ぐ)】(自五)㊀せわしく苦しそうに呼吸する。㊁くるしむ。「借金に―」

あえずヱ【(敢えず)】㊀こらえられない。「涙せき―」㊁

あえてヱ【(敢えて)】(副)㊀しいて。進んで。㊁(打消語を伴って)少しも。全く。「否定しない」

あえなヱ**い**ヱ【(敢え無い)】(形)㊀はりあいがない。はかない。もろい。㊁(敢え無く)なすすべもない。「一返事」

あえなくヱ**なる**【(敢えなくなる)】死ぬ。

あえものヱ【(和え物・(鹽え物)】あえた料理。野菜や魚介類に、みそ・ごまで酢などをまぜて調理する。

あえんヱ【亜鉛】【記号 Zn】金属元素の一。青白色で質がもろい。トタン板の製造や合金用などに使う。「―板」

あおア****【青】(名)㊀空色。㊁緑色。㊂馬の毛色。つやのある黒色。(の馬)。㊃(接頭)未熟の。「―二才」―**は藍**(ア)より出でて藍より青し」出藍(シュツラン)の誉れ。―**は出る**(ア)より出でて藍より青し」出藍(シュツラン)の誉れ。

あおア**あお**ア**しい**【(青々しい)】(形)㊀青い。㊁顔色が悪い。「―顔」㊂未熟である。―**とり**【青い鳥】【ベルギーの劇作家メーテルリンク(1862)の童話劇の題名】あこがれるような遠いところにあるもので、なく、気づかぬ身近なところにある幸福の意。

あおア**い**ア【(青い花)】(ドイツの詩人ノヴァーリス(1772)の小説の邦訳名)無限へのあこがれの意。

あおア**い**ア【(葵)】フタバアオイの異称。ウマノスズクサ科の多年草。葉の上に二枚のハート形の葉をつける。徳川氏の紋所はこれによる。かもあおい。―**まつり**【―祭り】(ウマノスズクサ)の祭り。

あおア**いき**ア**といき**ア【(青息吐息)】困りきっているさま。

あおア**いろ**ア【(青色)】―**しんこく**【―申告】法人税や事業者の所得税の申告のしかたの一。

あおア**うなば**ラ【(青海原)】青々とした広い海。

あおア**がい**ア【(青貝)】螺鈿(ラデン)(に使う貝)。―**ぬり**【―塗り】器物に、青貝・青白い色をした貝をはめ込んで漆を塗り、とぎ出したもの。

あおア**き**ア**り**ア【(青木)】ミズキ科の常緑きょう木。実は紅色。

あおア**ぎり**ア【(青桐・梧桐)】アオギリ科の落葉きょう木。幹は緑で葉は大きく、黄色い小花が群がり咲く。

あおア**ぐ**ア【(仰ぐ)】㊀(自五)上を向く。㊁(他五)㊀尊び敬う。㊁(命・令・教えなどを)請う。㊂(毒などを)飲む。

あおア**くな**ア**る**ア【(青くなる・(蒼くなる)】(他五)㊀青草のようなにおいがする。㊁(和え物・(鹽え物)を)まぜて調理する。

あおア**くさ**ア**い**ア【(青臭い)】(形)㊀青草のようなにおいが

〜は常用漢字以外の漢字　〜は常用漢字表にない音訓

あ

する。㊁未熟である。

あおぐも【青雲】青く晴れた空。青空。

あおざかな【青魚】背中の色が青い魚。サバ・イワシ・サンマなど。

あおざ・める【青ざめる】〔自下一〕青くなる。青く変ったり青い色に白く写る写真。㊁予想図。計画図。

あおじゃしん【青写真】㊀もと、設計図などの複写に使った青い色に白く写る写真。㊁予想図。計画図。

あおしんごう【青信号】↔赤信号。㊀進行してよいことを意味する交通信号。㊁一般に、行き先・将来が安全なしるし。

あおすじ【青筋】〔―を立てる〕ひどく怒る。怒ると静脈が浮き出してくるのでいう。

あおすだれ【青簾】青竹で編んだすだれ。

あおた【青田】稲の青々としている田。まだ実らない稲田。―**ばいばい**〔―売買〕稲の収穫前に、その収穫高を予想して青田のまま売買すること。

あおだいしょう【青大将】日本で最も普通のヘビ。体長一〜二m。無毒。ねずみとり。

あおだたみ【青畳】㊀新しい畳。㊁静かな海面の形容。

あおてんじょう【青天井】青空。〔―の下〕野外。

あおどうしん【青道心】㊀新しく僧になってまだ未熟な人。㊁むりに起こした道心。生ぜ道心。㊂そりたての坊主頭。

あおな【青菜】㊀色の青い菜の総称。〔―に塩〕しょげ返るさま。

あおにさい【青二才】年が若く未熟な男。青年を軽蔑していう語。

あおび【青―】〔―の上〕野外。

あおみ【青―】㊀青みのある濃い色。㊁なぜ色。凶事に使う。

あおみ・ける【―ける】〔―の上〕あおむく。

あおの・ける【―ける】〔―の上〕あおむける。

あおば【青葉】㊀青々と茂る葉。㊁若葉。新緑。

あおびょうたん【青―瓢箪】㊀未熟で青いヒョウタン。㊁やせて顔の青白い人をあざけっていう語。

あおみ【青味】㊀青い色(その程度)。㊁吸物や刺身・焼きざかな等に添える緑色の野菜。

あおみずひき【青水引】青黒い色と白色とを半々に染めた水引。図事用。

あおみどろ【―藻】淡水産の藻(も)の一種。緑色・毛髪状で、生理学・細胞学の実験材料に使われる。

あおむく【―仰向く】〔自五〕上を向く。↔うつむく―**き**(名)

あおむ・ける【―仰向ける】〔他下一〕上を向ける。あおのける。―**け**(名)

あおむし【青虫】チョウやガの幼虫で、緑色のイモムシの総称。

あおむしの【青物】㊀野菜類の総称。「―市場」㊁皮が青いさかなの総称。イワシ・サバなど。

あおやぎ【青柳】㊀(青々と茂った)ヤナギ。㊁バカガイの異称。

あおり【―煽り】㊀あおること。㊁余勢。「―をくう」

あおる【―煽る】〔他五〕[1]〔―煽る〕㊀風を起こす。あおぐ。㊁吹き動かす。ひるがえす。㊂扇動する。[2]〔―呷る〕一気に飲む。

あか【赤】[1](名)㊀色の名。㊁共産主義・思想者。㊂〔―鋼〕「あかがね」の略。[2](接頭)あらわな。全くの。「―裸の他人」

あか【―垢】㊀皮膚のよごれ。「―すり」㊁水(湯)垢。㊂付かれ。「心の―」

あか【―淦】船底にたまった水。ゆ。

あか・い【赤い】(形)赤色である。〔―信女(しんにょ)〕〔―七夫の墓石に、現存の妻の戒名は朱で刻むので未亡人。

あかいわし【赤―鰯】赤くさびた刀の俗称。

あかえ【赤絵】陶磁器の上絵に赤を主として使ったもの。宋(そう)赤絵・九谷赤絵など。

あかがい【赤貝】海産の二枚貝。肉は赤くすしのたね。

あかがね【―銅】〔赤金の意〕銅(どう)。㊁赤銅(しゃくどう)。「―色」

あかがみ【赤紙】〔赤い紙を使ったので〕軍の召集令状。

あかぎ【―足・掻き】あかくること。「最後の―」〔―が取れない〕どうにもしようが方法がない。

あかきこころ【赤き心】まごころ。忠義の心。

あかぎれ【―皸】「ひび」よりもひどいもの。「―が切れる」

あかくだ【―足・掻く】〔自五〕㊀馬などが前足で地面をかく。㊁もがく。㊂あくせくする。

あかゲット【赤毛布】㊀赤い毛布にくるまって歩いたので、都会人のいなかあがりさん。㊁不慣れな洋行者(その失敗)。

あかざ【藜】アカザ科の一年草。若葉は食用。茎は杖(つえ)にする。

あかし【―証】証明・証拠。「―を立てる」

あかし【―灯】ともしび。あかり。灯火。

あかし【明石】㊀兵庫県下の地名。㊁〔―明石縮み〕の略。縮みの高級絹織物。今は西陣が本場。

あかじ【赤字】㊀(不足額の数字は赤で示すので)支出超過・欠損。↔黒字。㊁(赤インクを使うので)校正の書き入れ。―**こうさい**〔―公債〕国家が歳入の不足を補うために発行する公債。

あかしお【―潮】海水中の微生物が一時に多量に繁殖して、海水が赤茶色に見える現象。

あかしくら・す【明かし暮らす】〔自五〕月日を送る。

あかしみ・る【―垢染みる】〔自上一〕垢がついて汚れる。

アカシヤ[acacia]㊀マメ科の常緑きょう木。インド・台湾などに産する。㊁ハリエンジュの俗称。

あかしんごう【赤信号】↔青信号。㊀停止を意味する交通信号。㊁危険な状態や不足を知らせるしるし。

あかしんぶん【赤新聞】社会の裏面や個人の私行をことさらに書きたてて下等な新聞。

あかす【明かす】〔他五〕㊀打ち明ける。㊁(夜を)過ごす。↔暮らす。㊂〔―証す〕証明する。

あかす【―飽かす】〔他五〕飽かせる。十分に使わせる。「金(ひま)にアカシて作る」

あかず【―飽かず】飽きないで。いつまでも。

あかせんくいき【赤線区域】もと、売春を目的とする

↔は造語成分　↓は参照語　↕は対語　図は文語

特殊飲食店街のあった地域。赤線地帯。

あがた【県】㊀大化の改新前、諸地方で開墾した土地。料地は「みあがた」。㊁地方官がその任国をいった語。㊂地方官。㊃いなか。地方。

あかだし【赤だし】(大阪風の)赤みそを使った味噌汁。魚肉汁。

あかちゃける【赤茶ける】(自下一) 古びて赤みがかった茶色になる。「畳が—」

あかつき【暁】(「あかとき」の転)㊀夜明け方。㊁(望みどおりになった時。「合格の—には」—**やみ**【—闇】月のない明け方(の闇)。ぎょうあん。

あかったり【上がったり】商売や事業などが不振なこと。「商売—だ」

あかつら【赤面・赤面】(多く、顔を赤く塗るので)芝居の敵役(ヤクガラ)。また悪形(ボウ)の異称。

アカデミー【academy】(プラトンが学問を教えたアテネ郊外の聖地)㊀プラトン学派。㊁学問や芸術の研究・指導団体。学士院・翰林院(カンリンイン)。㊂大学・大学院・研究所などの総称。—**しょう**【—賞】アメリカ映画芸術科学アカデミーが与える、最も権威ある映画賞。オスカー賞。

アカデミック【academic】(二形動)㊀官学的。学究的。㊁学風や芸術の技巧が、手堅いが古くさいこと。

あかでん【赤電】(赤電車の略。運転台上部の行き先を示す場所に赤電燈をつけるので)終電車。

あがな・う【贖う】(他五)㊀【(償う)】埋め合わせをする。

あかぬける【垢抜ける】(自下一)(容姿・技術などが)洗練されて、いなかくしろうとくさくなくなる。

あかね【茜】(「赤ね」の略)㊀アカネの根から採る染料(その色)。暗赤色。

あかのまんま【赤の飯】㊀せきはん。㊁(花・つぼみの色や形が赤飯に似ているので)イヌタデの異称。

あかはじ【赤恥】恥を強めていう語。人中でかく恥。

あかはた【赤旗】㊀社会主義者・労働者を表す旗。㊁危険信号の旗。㊂平家の旗。

あかはだ【赤肌・赤膚】㊀むけて赤くなった肌。㊁山に草木の無いこと。

あかはだか【赤裸】まるはだか。まるはだか。すっぱだか。

あかはら【赤腹】㊀ツグミの一種。森林にすみ、鳴き声が美しい。㊁イモリの異称。㊂ウグイの異称。

アガペー【agape】(キリストの愛。神の愛。⇔エロス)㊀赤い運動帽子。㊁(訳で)来客の手荷物を運ぶ人。ポーター。

あがほどけたっと・し【(吾が仏尊し】自分が尊んでいるものだけを尊いとする、狭い心をいうことば。

あかぼう【赤帽】㊀赤い運動帽子。㊁(訳で)来客の手荷物を運ぶ人。ポーター。

あかぼん【赤本】㊀草双紙の一。江戸時代中期以後発行された、赤表紙の絵入り物語。㊁粗悪で低級な本。

あかまいし【赤間石】(山口県に産する)水成岩の一。赤かっ色。すずり石用。あかま。あかまがせき。

あかみ【赤身】㊀動物の肉の赤い部分。⇔白身。㊁材木の中心の、質の密な赤い部分。心材。⇔白太(シラタ)。

あがめる【(崇める)(他下一)】尊び敬う。

あかもん【赤門】㊀赤い門。㊁(前田家の朱塗の正門がそのまま残っているので)東京大学の異称。「—派」

あから【赤ら】(接頭)赤みを帯びている(美しい)。「—顔(おとめ)」—**む**【自五】赤みを帯びる。—**める**【他下一】赤くする。

あからさま【(二形動)】(のまま。はっきり。露骨。

あかり【明かり】㊀光。「—取り」㊁ともしび。電灯。をつける。㊂証拠。あかし。—**さき**【—先】光のさしてくる方。

あがり【上がり】㊀(名)㊁(職がり)あがること。・下がり。㊂収益。㊃(接尾)以前その状態に長くあがること。「病気(役人)—」—**はな**【—端】家のあがり口。—**がまち**【—框】家の上がり口。入り口。—**ばな**【—花】せんじたばかりの茶。また、一般に茶の称。あがり。—**もの**【—物】㊀飲食物の敬称。召し上がり物。㊁神仏への供え物。㊂田畑の収穫物。—**ゆ**【—湯】風呂(フロ)から出るときに浴びる湯。おか湯。あがり湯。

あが・る【上がる・揚がる】㊀(自五)㊁・さがる。㊂有名になる。㊃現れる。「成果・効果が—」㊄上達する。㊅犯人が捕られる。㊆(「—」で)北へ行く。㊇行く。「参る」の敬称。㊈終わる。できあがる。㊉雨がやむ。㊊魚が死ぬ。草木が枯れる。㊋人学する。「小学校へ—」㊌ポーッとする。「飲食する」の敬称。

あかるい【明るい】(形)⇔暗い。㊀—電燈。㊁明朗だ。陽気だ。㊂物事に)よく通じている。

あかるみ【明るみ】㊀明るい所。㊁公の場所。表だった所。世間。—に出す。

あかる・む【明るむ】(自五)明るくなる。

あき【明き・空き】あいていること。所。すき。余地。

あき【秋】四季の一。「飽き」にかけても使われる。「—の景(空)」「—風が立つ」「—の声」秋の寂しさを感じさせる風の音、虫の音など。秋声。「—の七草」秋に花が咲く七種の野草。ハギ・オバナ・クズ・ナデシコ・オミナエシ・フジバカマ・キキョウ(または、ヒルガオ)。「—の日は釣瓶(ツルベ)落とし」秋の日の暮れやすい例え。

あき【飽き・厭き】(「安き」の転)飽きること。

あきあき【国名】㊀広島県西部。芸州(ゲイシュウ)。

あきおち【秋落ち】㊀秋になって予想より収穫が減ること。㊁豊作のため秋になって米価が下がること。

あきかぜ【秋風】秋に吹く風。・秋。「が立つ」

あきぐち【秋口】秋のはじめ。

あきこ【秋蚕】七月下旬から晩秋までの間に飼う蚕。「春蚕・夏蚕」

あきさく【秋作】秋に、栽培・成熟する作物。

あきさめ【秋雨】秋に、降る雨。⇔春雨。

あきしろ【明き白・空き代】(「明き巣・空き巣」の略)余白。

あきす【(「明き巣・空き巣」の略)】鳥のいない巣。

(一)は常用漢字以外の漢字　(一)は常用漢字表にない音訓

あ

あきたり→あくた

㊀人が不在の家。㊁「空巣狙(ねらい)」の略)人の留守をねらうこそどろ。

あきたりない【飽き足りない】十分には満足しない。

あきたりない【飽き足りない】「殺してもー」

あきた・りる【飽き足りる】(自上一)満足する。

あきないすい【商売】㊀商売。㊁売り上げ高。㊂[商内]株式の売買。**ー**【牛】牛のよだれ。商売は気長くせよの意。**ー**がみ【ー神】商人が守り神として祭る神。えびす。**ー**ぐち【ー口】商品のよさを述べたてる商売上の口上。**ー**みょうが【ー冥加】商人が商いに励むことによって神仏の加護をうけ、利益を得ること。商い

あきなう【商う】(他五)あきないをする。

あきなすび【秋茄子】秋、熟すナス。あきなす。**ー**嫁に食わすな)秋茄子は一うまいのでしゅうとめが嫁にいじわるをして(からだを冷やすから・種が少ないので子種の無いのを心配して)ということば。

あきめくら【明き盲】㊀目はあいているが物の見えない人。㊁文字の読めない無学な人。文盲(ぶもう)。

あきゅうど【商人】しょうにん。あきんど。

あきら【明らか】(ニ形動)㊀明るいさま。㊁はっきりしているさま。

あきらめる【諦める】(他下一)思い切る。断念する。

あきる【飽きる】(自上一)㊀[飽きる]満足する。㊁[厭きる]いやになる。

アキレスけん【Achilles腱】(アキレスはギリシア神話の英雄の名。この部分を除いては不死身であったという)足の筋肉をかかとの骨に付着させる腱。

あきれる【呆れる】(自下一)意外なのであまりのひどさに驚く。

あきんど【商人】(「あきびと」の撥音便)しょうにん。

あく【明く・空く】(自五)㊀開く。㊁無にひらく。㊂からになる。「席がー」㊃暇になる。「手がー」

あく【灰】(「はい」の転。)灰を水に浸して取った上澄み液。せんたく・染め物用。

あく【悪】㊀悪いこと。↓善。㊁[商品名]高圧の圧縮空気を詰めたボンベを背負い、自動調整器を通じて供給される空気によって長時間潜水する装置。一九四三年フランス人クストーの発明。スキューバ。

あく【悪意】㊀悪い考え。㊁憎む気持ち。㊂悪い意味。↔善意。「ーに解釈する」

あくいん あっか【悪因悪果】(仏)悪いおこないには、それが原因となって悪い結果があること。

あくうん【悪運】㊀運が悪いこと。㊁悪い事をしても、その報いを得ずに済む運命。「ー が強い」

あくえき【悪疫】悪性の流行病。天然痘・コレラなど。

あくえん【悪縁】㊀悪い縁。↓離れようとしても離れられない(一男女の関係。芝居で)悪人のえん。

あくがた【悪形】(芝居で)悪人の役(ーを勤める人)。かたき役。悪役。

あくぎ【悪戯】いたずら。わるふざけ。わるさ。

あくぎゃく【悪逆】人道にそむいた悪い おこない。

ぶどう【ー無道】悪逆を強めていう語。

あくぎょう【悪行】悪いおこない。不品行。

あくごう【悪業】(仏)死んでから苦難を招くような前世での悪いおこない。「ーの報い」

あくじ【悪事】悪いおこない。「ーを働く」【ー千里】悪事はたちまち四方に伝わる意。「ーのぐい。

あくじき【悪食】㊀粗末な食物。あくしょく。㊁いかもの。

あくしつ【悪疾】たちの悪い病気。

アクシデント[accident]予期しない事故。突発事件。災難。

あくしゃ【(幄)舎】儀式の際、参列者がはいる仮の建物。

あくしゅ【握手】(スル自)㊀あいさつに手を握り合うこと。㊁和解・提携。

あくしゅう【悪臭】悪いにおい。―を放つ―

あくしゅう【悪習】悪い習慣。「ーに染まる」

あくしゅみ【悪趣味】(名・ニ形動)㊀品の悪い趣味。㊁人のいやがることを、わざわざしたり言ったりして面白がること。

あくじゅんかん【悪循環】(物価と賃金の関係のように)密接な関連があるものが互いに関係し合って際限なく悪化していくこと。

あくしょ【悪所】㊀危険な所。難所。㊁遊郭。「ー通い」

あくじょ【悪女】㊀顔の醜い女。醜女。しこめ。㊁性質のよくない女。「ーの深情け」㊀醜女の、愛情深く、しつこい心が強いこと。㊁ありがた迷惑の意。

あくしょう【悪性】(名・ニ形動)(人や病気のたちが悪いこと。**ーが**【ー金】遊蕩費(ぜい)。

あくしょく【悪食】粗末な食物。粗食。あくじき。

アクション[action]㊀行動。動作。㊁映画・演劇で)演技。特に動きの激しいこと。「ーードラマ(俳優)」

あくせい【悪声】㊀悪いこえ。㊁悪いうわさ。「ーを放つ」

あくせい【悪性】(名・ニ形動)たちが悪いこと。↔良性。

あくせくする【齷齪・(偓)促】(スル自)(小事にこだわって)コセコセと落ち着きのないこと。「ーと働く」

アクセサリー[accessory]服装に調和をとるための付属品。帽子・ネクタイ・耳輪・ブローチなど。服飾品。

アクセル[accelerator の略]自動車の、足で踏んで速度を調節する装置。

あくせん【悪銭】不正な手段で得たお金。「ー身につかず」

あくせん【悪戦】[スル自]苦しい戦い。「ー苦闘」

アクセント[accent]㊀一語のうち、強く発音する箇所。また、その符号。日本語は高低アクセント。㊁語調。㊂強調。

あくそう【悪僧】㊀悪い人相。㊁不吉な現象。

あくた【芥】ごみ。ちり。くず。

あくたい【悪態】㊀おこないの悪い僧。㊁荒々しい僧。

↔は造語成分　↓は参照語　‡は対語　(文)は文語

あ

あくたい【悪態】悪口。あくたれ口。「―をつく」
あくだま【悪玉】悪人。↔善玉
あくたれ【悪たれ】あくたれること。乱暴。いたずら。（な子供。
あくたれる【悪たれる】(自下一)無理を言って乱暴する。悪太郎。いたずらっ子。悪童。
あくたろう【悪太郎】
あくち【悪血】病毒を含んだ血液。わるち。
アクチブ(active)(党・組合などの)積極的な活動分子。
あくど・い(形)㊀いとわしいほどくどい。㊁あくらつだ。「しっていう語」
あくとう【悪党】㊀悪者の仲間。㊁悪人。㊂人をののしっていう語。いたずらっ子。「―漢」
あくどう【悪童】
あくどうもの【悪道者】乱暴者。
あくとく【悪徳】徳義にそむいたおこない。不正行為。
あぐ・ねる(倦ねる)(自下一)あぐむ。「捜し―」
あくねん【悪念】悪い事をしようとする心。悪心。
あくば【悪罵】(スル他)口ぎたなくののしること。
あくび【欠】㊀(欠伸)(スル自)生理現象の一つ。―をかみ殺す。㊁漢字の部首の一。欲・歌などの「欠」。
あくびょう【悪病】たちの悪い病気。難病。
あくびょうどう【悪平等】何でも無差別に平等にすること。誤った平等。
あくぶん【悪文】主題がはっきりせず、文脈が混乱していて、何を言おうとしているのか、よく理解できない文章。下手な文章。
あくへい【悪弊】悪い習。
あくへき【悪癖】悪いくせ。「矯正」
あくま【悪魔】㊀(仏)魔。「払い」㊁キリスト教で、神にそむいて地獄に落ちたもの。サタン。㊂人非人(ひとでなし)。―しゅぎ(―主義)十九世紀末、欧州に起った文芸上の一傾向。現実の社会道徳に反抗して、人間の内面から起こる必然性に基づいた自己の自由を主張する。
あくまで【飽くまで】どこまでも。十分。
あくみょう【悪名】悪い評判。汚名。あくめい。
あくむ【悪夢】不吉な夢。恐ろしい夢。
あぐむ(倦む)(自五)しとげかねていやになる。もてあます。「攻め―」
あくや【悪役】悪形(がた)。
あくゆう【悪友】良くないことに誘ったり、仕事・勉強・喫茶的の気持ちを失わせるような友人。実際には、比較的に言うことが多い。
あくよう【悪用】(スル他)悪い目的のために使うこと。
あぐら【胡坐】・【鼓坐】座り方の一種。―をかく。㊀足を崩して座る。㊁のんきに構える。
あぐらつ【悪辣】(名・ニ形動)ひどくたちが悪いこと。
あぐりあみ【揚繰り網】イワシ・カツオ漁に使う巻き網。
あぐりょう【悪霊】たたりをする死人の霊。
あくりょく【握力】物を握る力。「―計」
アクリル せんい【アクリル繊維】合成繊維の一。アクロニトリルを主成分とする。衣料などに用いる。
あくらつ【悪辣】(名・ニ形動)ひどくたちが悪いこと。
アグレマン(agrément)大・公使を派遣する前に、相手国に求める承認。
アクロバット【acrobat】曲技・軽業・綱渡り。
あけ【朱・緋】㊀赤色。―に染まる。㊁朱色。
あけ【明け】㊀あけること。㊁夜明け。↔暮れ。「―の明星」㊂明け番。
あげ【上げ・揚げ】㊀あげること。↔下げ。㊁和服の一部。「―をおろす」「肩―」㊂「油揚げ」の略。
あげあし を とる【挙げ足を取る】相手のことばじりをとらえて非難する。
あげいし【阿兄】兄を親しんで呼ぶ称。
あげいた【上げ板・揚げ板】(台所などの)板の間の取りはずしのできる板。この下に物を入れる。あげぶた。
あげがらす【挙げ烏】夜明けに鳴くカラス。
あげく【挙句】㊀連歌・俳諧(はいかい)の最後の七・七の句。↔発句。㊁挙げ句。終わり。結局。とどのつまり。―の果て。㊂あげく。
あけくらす【明け暮らす】(他五)月日を送る。
あけくれ【明け暮れ】(副)朝に晩に。明けても暮れても。日夜。いつも。―思う」
あけ く・れる【明け暮れる】(自下一)夜が明け、日が暮れる。月日がたつ。
あげしお【上げ潮】差し潮。↔下げ潮【―に乗る】好運に恵まれて調子がいい。
あけすけ【明け透け】(ニ形動)遠慮のないこと。露骨。
あげぞこ【上げ底・揚げ底】箱・桶(おけ)などの底を、上の方へ高く上げて作ること。作ったもの。
あげだい【揚げ代】芸者・遊女を呼ぶ代金。揚げ銭。
あげだし【揚げ出し】豆腐やナスなどを、ころもをつけずに油で揚げたもの。「と。戸の―」
あけたて【開け・閉て】(スル他)あけることとしめること。
あけつらう【論う】(他五)議論する。―いし(名)
あけて【明けて】(副)新年になって。―三年になる」
あけて【挙げて】(副)残らず。すべて。ことごとく。
あけて【揚げ戸】縦みぞに沿って押し上げて開く戸。
あけのこる【明け残る】(自五)夜が明けきらず、星や月の光が残っている。
あけの みょうじょう【明けの明星】明け方、東の空に見える金星。↔宵(よい)の明星。
あけは【揚げ羽】蝶(ちょう)の一。大型のチョウの総称。特に、黄色の羽に黒い筋やまだらのあるもの。幼虫は柑橘類(かんきつるい)の害虫。あげは。
あけはなす【開け放す】(他五)(戸などを)すっかりあける。あけたままにしておく。あけはなす。―し(名)
あけはな れる【明け離れる】(自下一)(夜が)すっかり明ける。「けわたす。
あけはら う【明け払う】(他五)㊀あけはなす。㊁あけはらう。
あけばん【明け番】㊀宿直(とのい)を終えて勤務を解かれること。㊁勤務の翌日の休日。あけ。
あけび【木通・通草】アケビ科のつる性落葉かん木。花は淡紅紫色。実は秋になると紫色に熟して割れる。食用。つるは細工用。やまひめ。

〜は当用漢字以外の漢字　〜は当用漢字音訓表にない音訓

あげひばり【揚げ雲雀】空高く舞い上がってさえず［るヒバリ。

あげぶた【揚げ蓋】あぶた。

あけぼの(ノボ)(曙)㊀夜明け方。あかつき。㊁黎明期(ハイキ)。

あげまき【揚巻】(総角)㊀昔の、子供の髪型の一。髪を左右に分けて輪にし、つの状に結ったもの。また、その髪の子供。㊁ひもの結び方。「一結び」

あげまく【揚げ幕】楽屋と橋掛かり(花道)の境にたれ下げる幕。

あげまど【揚げ窓】突き上げると廂(ヒサシ)のようになる。

あげもの【揚げ物】㊀油で揚げた食品。㊁盗んだ品物。

あげや【揚屋】遊女を招いて遊ぶ家。「一町」

あける【明ける】〔自下一〕㊀時がたって新しくなる。↓暮れる。「年(夜)が—」〔他下一〕㊁期限が満了する。「年季が—」㊂開ける。〔他下一〕「あく」の他動詞。「戸(席・手)を—」

あげる【上げる・揚げる・挙げる】〔他下一〕㊀↑さげる。㊁目立たせる。取り出し示す。㊂ほめる。㊃上達させる。㊄髪を結う。㊅胃の中のものを吐く。㊆召し取る。㊇油の中へ入れて煮る。㊈芸者・遊女を呼んで遊ぶ。㊉上げ下げ。㊊与える。「〜してやる」の丁寧語。㊋動詞について謙譲の意。「願いてアゲます」

あけわたす【明け渡す】〔他五〕(今までいた城・家などを明けて他人に渡す。—し(名)

あけわたる【明け渡る】〔自五〕夜がすっかり明ける。

あこ(ノ)【(腸)・(嚢)】㊀器官の一。—上(下)—㊁したあご。おとがい。「—ひげ」「—が落ちる」たまらないほどおいしいことのたとえ。「—が干上がる」貧乏で食えなくなる。「—で使う」尊大な態度で人を使う。「—を出す」ひどく疲れる。「—を外す」大笑いする。

あこう(ノウ)【(雀榕)】クワ科の常緑きょう木。暖地の海辺に自生。幹の周囲から気根の常緑きょう木。暖地の海辺に自生。幹の周囲から気根を生ずる。材はひき物、器具。

アコーディオン[accordion]楽器の一。手風琴。[材。

あこがれる【(憧れる)】〔自下一〕心をひかれてひたすらそのものを得ようとする。思いこがれる。—れ(名)

あこぎ【(阿漕)】(名・三形動)〔古今六帖(ジョウ)〕平安時代の歌集)に「逢(ア)ふことを阿漕の島に引く網のたびかさならば人も知りなむ」とあるところから)㊀同じことが繰り返されること。㊁飽くことなくむさぼること。貪欲(ドン)。㊂無慎非道なこと。

あこや(ノ)【(阿古屋)】阿古屋珠(ジュ)の略。—**がい**(ガイ)【—貝】曖海産の二枚貝。養殖して、真珠を採る。真珠貝。—**だま**【—(珠)】アコヤガイから採る玉。真珠。

あさ(ノ)【(麻)】㊀クワ科の一年草。皮から繊維をとる。㊁麻布。「—の中のもぐら」(ヨモギでも麻の中にはえれば、そのまっすぐなのに影響されるように人も善人と交われば感化されて自然に善良になるたとえ。

あさ(ノ)(朝)↓ダ・晩

アサ[ASA]〔ASA感度の略。ASAは、American Standards Association の頭文字〕アメリカ標準規格協会が一九四七年に定めた、写真フィルムの感度を示す指数。エーエスエー。

あざ(ノ)(痣)皮膚にできる赤(青)いまだら。生まれつきのものを母斑(ボハン)という。

あざ(ノ)町、村内の区画名。大字・小字の総称。あざな。

あさい【(浅い)】(形)㊀↑深い。㊁(色が)淡い。

あさいち【(朝市)】朝、開かれる市。

あさうら【(麻裏)】㊀麻の裏地。㊁〔「麻裏ぞうり」の略〕平たく編んだ麻糸を裏につけたぞうり。

あさおき【(朝起き)】(スル自)㊀朝早く起きること。↓朝寝。㊁朝起きたときのきげん。「—がいい」「—は三文の徳」朝早く起きれば何かしら利益がある。

あさがえり(ガヘリ)【(朝帰り)】(遊里などに泊まって)朝、自分の家に帰ること。

あさがお(ガホ)【(朝顔)】㊀ヒルガオ科の一年生つる草。夏の朝、開花。観賞用。㊁小便所の受け筒。

あさがけ【(朝駆け・朝懸け)】(スル自)㊀朝早く、不意に攻撃すること。㊁朝早く不意に人を訪れて、依頼や取材などをすること。㊂朝早く出かけること。「—の

あさがら【(麻殻)】たやすいことの例え。

あさがら【(麻殻)】麻の皮をはぎ取ったあとの茎。盂蘭盆(ボンボン)の迎え火をたくのに使う。

あさぎ【(浅葱)】(名)㊀薄い藍色(アイイロ)。水色。㊁浅葱裏の略。—**まく**【浅(葱)幕】芝居で使う浅葱色の垂れ幕。

あさぐろい【(朝)】(形)(顔色が)薄黒い。

あさげ【(朝)】朝の食事。朝飯。あさけ。↓夕餉

あざけ・る【(嘲)る】(他五)見下げて笑う。—り(名)

あさじお【(朝)】(朝潮)、朝、さして来る潮。↓夕潮

あさじめり【(朝湿り)】(霧や露などで)朝、物が湿っていること。

あさだち【(朝立ち)】(スル自)朝早く出発すること。↓夜

あさぢ【浅(茅)】短くまばらにはえたチガヤ。「—が原」

あさつき【浅(葱)】ユリ科の多年草。葉と鱗茎(リンケイ)は食用。せんぼんわけぎ。

あさづけ【浅漬け】生干しの大根を塩・こうじでザッと漬けたもの。浅漬大根。

あさって【(明後日)】㊀あすの次の日。「紺屋(ヤ)の—」㊁(俗に)見当違い。「—の方を向く」

あさつばら【(朝つ腹)】㊀朝食前のすき腹。㊁(朝つばら)

あさづまぶね【(朝妻船)】㊀昔、琵琶湖東岸の朝妻(ヅマ)から出た船。㊁江戸時代の画家英一蝶(イッチョウ)が好んでかいた、烏帽子(エボシ)・水干姿の遊女が朝妻船に乗っている絵。

あさで【浅手・浅(傷)】軽い傷。うすで。↓深手

あさな【(朝)】(名)こりこうだ。

あさな【(字)】学者・文人が本名以外につける名。「頼翼(ライヨク)—山陽」—は子成」

あさな【(朝)】毎朝。あだな。

あさな【(朝)】毎朝。あだな。

あさな【(朝)】毎朝。あだな。

あざな【(字)】(名)㊀あだな。㊁あざ。小名(ショウ)。

あざな・う【(糾)う】(他五)からみ合わせる。なう。

あさなゆうな【(朝な夕な)】(副)朝に夕に。常に。

あさのは【麻の葉】麻の葉を図案化した染め模様。赤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo